



KODOKU
NO
KICEN

孤独の起源

見上げていると首が痛くなるような高い本棚の間を、数冊の本を抱えて進んで行くとそれらの谷間よりやや明るい場所に出て、彼は歩みを止めた。

光が差し込んでいた。

壁の隅にある細い高窓から、棚を避けて床に落ちている。

かろうじてつま先が光に浸されていた。壁際の長い椅子にひとりの人が坐っている。目が僅かに慣れ始めてその人物が上半身だけを捻って、背もたれに身を任せて目を閉じている事が解った。薄く明るい色の髪が軽く波立っていて、卵形の顔の滑らかな頬を紋様のように黒と白に分けていた。体躯はあまり性を感じさせない。

薄いブルーのシャツから細い手首、甲、そして5本の指が本を胸に抱えている。側で見下ろすと、黒い細いジーンズに白い靴下洗い晒したスニーカーが、質素な生活を好む性格を思わせた。

抱えられていた本の、一番端の分が何かを主張したかったのか、誰かの気持ちを代弁をしたのか、滑らかな天鵞絨貼りの椅子から床へゆっくりと落ちた。

なにしろ、それがきっかけになった。

「なあ、先輩？起きた方が良くないか」

屈んで本を拾いながら声をかけた。響きは硬くて緊張しているのに、彼は自分でも驚いていた。

目が開く。

かつての地球で海が空の色を、空が海の色を映しているのだと、例えられたように彼と相手の瞳の色は驚く程似ていた。

父が歪な炎の翼を持ってして地球の大気の間へ舞い降りて来るのを、窓から眺めるのが子供の決め事だった。彼は宇宙船の操縦士で、船は様々な実験を成層圏内で試していた。

例えば、砂漠化した大陸の上へ化学物質を播く、天候に影響を与える為に。

更には、多少の水分を含む土壌へ数種類の穀物の種を蒔くのも。

うまく行けば乾いた土地に雨が降り、太陽の恵みがあれば種は芽を出す。

以前は。

過去の話になってしまったのは、先達へのミッションで彼は還らぬ人となったから。

地球はあまりに楽観的な思考の持ち主が大部分を占めていた人類に、過去の遺産である石油を燃し尽して、自らの生存に必要な酸素を作り出してくれる優秀なシステムの巨大な自然林を切り倒して街を広げ、明るさで昼も夜も継ぎ目のない日常をつくり出してから、それらが将来を危険

に晒しているのだと気づいた。

沢山の人々が色々と考え行動も起こした。しかし、生まれ落ちた時から身を置く生活環境に、順応するよう特化されている野生動物と真逆に、産業や科学を道具に使用する事に困って、自分達に心地良いプレイスを作って生きて来た人類には、進化の道を後ずさるにあたる行動など無理にも等しかった。

地球上の文明圏であらゆる格差が、人々の生活を蝕み始めた。宗教を飛び越えて人類のたったひとつの幸福への鍵である「資本主義」がもしや間違っているのではあるまいか、あちこちで誰かが疑問を持って足元へ向けていた瞳を辺りへ向けた頃。

哀れな彼等は住処の有り様に愕然とした。

暫くは忙しかったに違いない。大気や水の正常化に必死になり、世界の隅の隅の中では、変わってしまった地球に順応して生きて行けるようにと、身体の改造も行われていただろう。地表は人の生存に適さない程に紫外線や諸々の侵入で荒れ果て、彼等は各国政府や同盟関係国や、企業の建築したドーム内へと移り住んだ。住むには後者に向かうに従ってお金がかかったが。

富豪マンスーラ家が所有するドームに父と子供は住んでいた。父親は大家の分家のひとつが担当するミッションの雇われ宇宙飛行士で、仕事の度に戻れぬ場合の保証等がびっしりと並べられた契約書にサインをしていた。古風にも文字で名を綴るそれは今やかなり高度な作業で、星自体の疲弊はそこに住む人類にさえも読み書きをあまり楽しみと感じさせなくなり、教育をしっかりと受けるかファームドームで労働するかのどちらかに人は振り分けられていた。

子供には正しくは母はいない。

子供を作る遺伝子は父親だけのもので、人間となる為の対の遺伝子は彼の物を改造して使用された。パートナーは欲しいが、作る暇がないとか、満足するように構ってやる時間がないという、特殊な職業の人間がそんな方法で相手を得る事を許されていた。製作現場では、「ドール」と呼ばれていた。

子供は他の「ドール」達に会った事もある。

父に連れられて、クスクスの美味しい店へ行った。そこには父の同僚が数人いて、夫々に恋人を連れていた。ブロンドの美人、細い切れ長の瞳の黒髪の人、ふっくらとした胸元をレースをあしらったドレスの似合う人。

3人は父の連れが子供である事を驚いているようだった。それは彼女達の連れ等も同じで、女達に「ちっちゃいわ」「かわいいー」と構われていた子供の耳に、父親の「俺は親父ってのになりたかったんだよ！」という声が聞こえた。

ふと、そっちを見るとカウンターで皿とビアのグラスを前にしていた父が手招きした。

子供は大きく頷いて全力疾走で側に駆け寄り飛びついて膝に乗った。

「ふーん、悪くはないねえ」

隣の席で黒髪の細身の美人の腰を抱いた男が呟いた。

それが他の「ドール」等の記憶。

父親からだけ作られた子供の筈だったが、さほど唯一の親に似ている所がなく、面白いものだ、遺伝子は不思議だと彼は表情を緩めていた。笑みの訳は子供の髪の色だけは父親の懐かしい祖母と同じらしい。

大きな掌が少し癖のある髪をかき混ぜた。

子供は緩やかな速度で成長して行った。そこが他の「ドール」達と一番違う所だった。

大きい仕事がやって来て、父はいつもより長い紙の契約書をソファに腰かけて目を通してから、机に向かってペンを走らせ何度も氏名をサインして、出発し戻らなかった。

そのミッションで戻らなかった乗員の家族や関係者が、ドーム内にある中央センターから呼び出しを受けたのは数日後の事だ。

父親が亡くなるに到ったミッションは困難なもので、子供や同僚の肉親や家族にしてみれば殺されたようなものだが、それを是として出かけて行ったのは消えて終わった彼等だ。

中央センターの保証のどれに応じるかを決めるのが、残された者の権利と最後の役目だった。

数日後、子供は惑星移民を主な業種とする、第4ドームに向かうチューブの中にいた。

子供が決めた遺族としての選択は惑星エセクタへの移民で、そこへ向かうの星間通路を所持しているのは第4ドームだけだからだ。

荷物は旅行用鞆がひとつ。移民先には色々と規制が多く、荷物の量は限定されていた。

尤もコテージ内のあれらは父自身ではないので必要ないのだが、許されていた量内で子供は父の形見となる筆記道具を選び持って来ていた。

「独りでどこに行くの？」

声をかけられ子供はぶらぶらさせていた足の動きをとめた。向かいのシートに子供と同年齢くらいの少年と、その母親らしき人が坐っていた。

「エセクタへ行くんです」

おそらくは宙港しかないドームへ向かうチューブの中に、息子と似た歳の子供が1人で乗っているのを不思議と感じていたのだろう母親は目を丸くした。

「エセクタへ独りで？」

「はい」

彼女の隣で、子供が不審そうに親を見上げていった。

「いっぱいお金がいるんだよね、ママ」

「知ってるよ」子供は答えた。

「じゃ、どうやって」母親は身を乗り出して問いかけて来た。

「父の遺産です。父の命を代価にエセクタに行けるんです」

子供の答えに彼女は黙り込む。

窓の外は真っ暗だったが、駅に着いたのか急に明るくなった。

エセクタは、惑星開発機構からマンスーラ家に買い取られ、改造が続けられている。

昔の地球のような青い空と、清い水、涼しい風の吹く場所と、移民を薦めるコマーシャルを何度か見た。

父親の命は子供をそこへ連れて行ってくれる。

迷わず子供はそれを選んだ。

父親のいない場所なら、どこだって同じで、父がかつてはいた所に留まるなど、死んでも嫌だと思った。

エセクタに向かう船の中、窓に頬を付けて父の仕事場所だった宇宙をよく眺めた。船の進行方向をふさぐデブリを消すビームの掃射が始まると、思いのほか明るい宙の遠くの方で大小の爆発が起き、まるで次々と開く蕾みに似て大きな花束にみえた。

地球から離れる事よりも、ずっとそれが胸に刻まれたのは、父の為だけに造られた「ドール」の自分が、彼がいなくなった今、どうしたら良いのか解らない。それがたったひとつの心配だったからだろう。

窓の外の大きな花束が滲んでぼやける。

「……父さん」

冷たい硬質プラスチックの窓に頬を強く押しつけて、遠くなる花束を見えなくなるまで目に焼付ける。あそこが彼のいた場所だと。

少しのつもりだったのに。坐ってひと休み。聞き馴れない声に呼びかけられて、目を覚ました私は居眠りしていた事に気づいて驚いていた。

「あ………」

高い所にある窓からの光の拡散は、ボールのようで直ぐ側で持って立っている人の顔をはっきりとは見せてくれなかった。

「少しくらいさぼったって、誰も文句は云わないさ。でもどうせ休むならあっちの日陰のソファにした方がお肌に良いかもな。皮膚ガンは嫌だろ。ここは昔の地球みたいにオゾン層がまだ分厚くなってないらしいね」

声の調子は相手は男性と教えてくれる。私は眠気が抜け切らぬぼんやり顔をしていたに違いない。彼は持っていたらしい本を私の膝の上に乗せてそれごと抱き上げると、殆ど重さを感じない様子で日陰のソファまで運んで行った。静かに布張りのそこに下ろすと自分は端に腰かけた。

「今週からの新入りなんだ、よろしく」

「こちらこそ」

やっと互いの顔を見るのが適った。同じくらいの歳か。灰色っぽい髪の方で、顎のしっかりした少し粗野な感じの顔立ちなのに、瞳がそれを打ち消していた。薄く明るい蒼。虹彩の外側に向かってやや灰の目が、思慮深さとか、温厚さを現わしていた。

自分でも思わぬ切なさが込み上げて来るのを、彼に気取られぬように私は必死になってこらえていた。

これは何だろう。

どうして、こんな思いが生まれて来た？

「あんた、美人だな」

まじまじと見ていたのは、お互いだったらしい。彼は少し笑顔になって云った。

「でも、愛想は悪そうだ」

からかう言葉が続く。胸の苦しさはともかく、負けっぱなしは嫌いで私は答える。

「貴方は外見の割には、繊細そうですね」

関節のしっかりした、掌の分厚い手が伸びて来た。

わざとゆっくりと動かされる映像。

それに似た感覚をおぼえる。

頭の奥で胸と別の私が、注意を促した。恋や愛は人生にはいらぬ事と決めていたのではなかったのか？誰が求めようと、答える義務はないと。親しい友さえも作らず、この楽園で独りぼっちを苦とせず生きて来たのではなかったのか？

でも。

胸の私は呟く。どうしてだろう。

抱き寄せられても、私は抵抗も逃走もしなかった。初めて出会った彼。

切なさをもたらした。顔、声。彼は誰だろう。

両手では包めない背中を諦め肩にそっとしがみつき、私は彼の胸に顔を埋めた。

エセクタに移住して来たばかりの、幼い頃から一匹狼で有名だった私。誰と親しくならず、話しかけられたなら一応の返事はするものの愛想の欠片はなし。成長してスクールを出て図書館で勤務についても、それは変わらなかった。

「誰にもなびかなかったのにねえ」

「そりゃ、あの人も好みがあったって事でしょ？」

「でも、あの有様はなんというか」

「がっかり？普通の人間って事が解って？」

仕事中に遠くの方から、ひそひそとそんな話声が聞こえて来る。

誰の事を云っているのかは解る。私の事だ。

同僚達は彼と逢ってからの私の変貌に驚いている。気持ちは解らないでもない。それまでとまったくの別人とまでは、云わないが確かに違う。

仕事に早く馴れるようにインストラクターのついた彼とは、作業中はほとんど逢わなくなった。その代わりに二人で昼食を一緒にする約束した。ほんの少しの時間でも、終業時までのもどかしさをいくらかは補ってくれる。

食堂の窓から見える外の季節は麦秋。遠くの地平線付近に見えていた畑が、新緑からいつの間にか煌めく黄金になって風にそよいでいる。

私もあんな風に変化したのだろうか？

彼を待つ間、林檎味のシェークをストローで飲みながら思う。

「ハイ、彼はまだ？」

「ええ」

同僚の誰かが軽く肩を叩いて来る。職場は同じであると知っているけど、名前は覚えていない

黒髪の女性だ。胸につけている認識票を見たなら多分、直ぐに名前を知る事が出来るだろう。でも、今の私はしようとは思わなかった。

隣に立った彼女は笑顔で私を見ている。

何と云うか、以前の人から注がれる視線とはかなり違う感じで。私も彼女の顔を見る。

「顔の作りって一種のハードよね」

「ソフトが充実していないと宝の持ち腐れ？」

「そうね、綺麗な顔なのによって思ってたし、私、ずっと見てたのよ。貴方の事」

「ずっと？」

「そう」

彼女は頷いた。

「友達になって、色々話せたら楽しいかもって考えてた。本を扱うのが丁寧でしょ？紙で出来た物が好きなんだろうって。私もね。でも、取り付く島もなかったから、我慢してたの。嫌われるのも怖かったしね」

「……………」

彼女は胸で組み合わせていた腕を解くと、深呼吸をして私の頬にキスをした。

「これはプロポーズ、友達になりたいの」

「私と？」

「そう。嫌だったら、そのナプキンで直ぐ拭って。そうでなければ、ちょっとの間そこに残しておいてくれる？」

「はい。」

私の手にナプキンは取られる事なく数分が経った。彼女は嬉しそうに微笑み、私の耳元に囁いてそこを離れた。

「派手なキスマークつけているな」

むっとり顔で現れた彼に、私は笑った。

「友達にとプロポーズされたんです」

「……受けたのか？」

「はい」

「……………」

黙り込む彼に私は身を寄せ耳元で囁く。

「貴方とはまったく違うレベルです。私にとって、貴方はスペシャルな人なんです」

「スペシャル……、悪くない響きだ」

二人は昼食にオーダーメニューを眺めてベーグルのセットに決めて、彼がレジに向かった。その背を見ながら私は、ウェットティッシュで頬の口紅を拭った。

目に見えなくなっても、その約束は消えないのが解って来たから。

彼を求める気持ちを知った。

だから、私を求める人がいる野も理解出来るのだ。

トレイをふたつ持って振り返った彼は、私の顔からマークが消えてるのを見て少しはにかんで笑った。

彼のコテージに招かれたのは、初めて出会ってから2週間後の休息日の前日。

仕事の後に、食事を一緒にして部屋で寛いだ。

「もう少し、本は丁寧に扱った方が良いでしょう。貴重なものなんですから」

私の仕事は、地球の飛び地としてひとつの州となったエセクタを農業惑星とする為に、知事が地球から運び出して来た膨大な資料の整理で、紙に印刷された古い書物などが大量にありその分類、整理、保存の強化、である。

「はいはい」

「本当は適性検査、ファームの方じゃなかったのでは？」

「云ってくれるねー、自分はいねむりこいてた癖に、初めて会った日！」

「あ、あれはー」

それは、休日の翌日。

仕事が農業でない州民が自由に参加できる、開墾や農業諸々の仕事のイベントがある。

たまにはと、参加した所為かその日は朝から体が怠く、頭もぼんやりしていたのだ。

「寝顔、可愛いかったな」

「それはどうも！」

笑いが弾ける。

私達の諸々の好みは似ていて、あまり気兼ねをする必要を感じず、親密さを覚えるスピードは目まぐるしい程だった。

食事も会話も楽しく心地よく、やがて、夜が来た。

「おい、全部脱がせちゃったんだぜ。こっち向いてくれよ、このままじゃ何も出来ないって、俺にお前の背中ばっか齧ってと？」

背後で俯せになって動かない私をあやすような、文句を漏らす彼がいる。

「今まで、云う機会がなくて」

「なんの？」

「私の性別です」

「俺はどっちでも構わない。それとも、男が相手じゃ嫌なのか？」

「いいえ、私は貴方が好い」

「俺もだよ」

暫く部屋は静まって、私は答えた。

「私は、宇宙飛行士用の、ドールなんです。今まで黙っていて、ごめんなさい」

それを聞いて、彼は答えた。

「ああ、遺伝子が1人分で作られてて、わざと生殖能力をなくされている？」

身を振って振り返り私は彼を見上げた。そして他の誰にも、移民の為の検査の場だけは他人に教えた自分を晒す。

「そうです。私は胸にも下肢にも果実を持ちません」

「構わないよ。優しい意味で云ってないけどね。俺はお前が好い、お前も好いならそれでいいだろ、俺は構わない」

彼は優しく続けた。

「欲しいよ。欲しくないか？」

「欲しいです」
「なら決まり」

初めてとは思えない素早さで私と彼は体も結ぶに至った。蕩けるような一体感、もう離れたくないと思う切なさ。

色々な感情が、それなりにある性感を彼に刺激される度に浮かび、消え、そして刻まれた。思ってもみなかったが、私の胸を探る彼の様が赤児のようで愛おしいとか、体格に差があるので簡単に扱われると、生意気だと思ったり。

体をバラバラに、遺伝子まで細かくされるように。

彼は微細な場所まで、私を知っていた。

死のようなけだるさの中で目を覚ますと、辺りはまだ暗くて、体はさっぱりとシャワーもすまされ、残っているのは中に残る小さな炎だけだった。彼に触れられるなら直ぐにでも、焔になってしまうかのような。

彼はベッドにはいなかった。

辺りを見回すと、窓辺でブラインド越しに外を見ている姿があった。

「あの...」

彼が振り返った。表情は良く見えない。

「側へ行っても？」

「いや、外の空気吸ってるだけだから、直戻る。好い子で待っておいで」

優しい思い出のような、声音。

私は頷いて、枕に頭を乗せた。

窓を閉じる音がして、彼の足音が部屋に響きながらやって来る。ベッドの端に重み、それが隣に存在を大きく広げて、体温が私を包んだ。

「あんたは、どうやってここへ来る金を工面したんだ？聞いてもいいならだけど。やっぱり割の良い仕事とかで？」

「いいえ、私がここへ来たのは十代の子供の頃ですから」

「じゃ、どうやって？」

「保護者が宇宙飛行士と云いましたが？」

「事故か」

「ええ、父が遺言状を残してくれていたものでドールの私でも、保証を受ける事ができたんです.....」

暫く部屋は静まり返り、二人は夫々に何かしら考えていた。

「貴方は？」

「あ、あんたの親父さんと同じ職業だったんだよ。それで、実はオリジナルは亡くなっていて、奇跡的にクローンを造れる細胞が残っていたんで、再生されてここへ来た」

「ドールとクローンですか、私と貴方は」

彼の胸の中で身じろぎして、顔を見上げると、思わなかった静かな表情に出会った。

「夜の空気を吸って、星空を見ていると何かを思い出すような気がする。記憶のデータが結構前

のしか残ってなくて、オリジナルが死んだ頃は何も覚えていない。最近になって時々思い出すんだけど」

「思い出？」

「髪の毛だ、少し癖があって明るい色の。あんたと同じ色の。ちっこいのが俺を呼ぶんだよ。父さん……って」

私は彼の頭を胸の中に抱き締めた。

記憶が朧なのは、私も同じだったのか。

あの日、地球を離れる日、宇宙を飛ぶ船から見た、大きな花束。

とてつもない大きな喪失感と、不安と、悲しみを抱えた、子供だった。

あの胸を冷たさと乾きと空虚なもので満たしたものは、一体どこからもたらされたのだろうか。私は片親した持たない「ドール」で厳密には亜人間だ。人のようなもの。そこそこに意思を持ち、従属する人間に懐く貴重な動物とはまた違うがペットに似た。

しかし、この思いは人形に必要なものなのだろうか。知らずにいたらもっと、あどけないままに幸福だったのではないか。

何も知らずに笑い、享楽に浸り、誰とでも愛を語らい。

誰から私は思いを貰ったか。独りを選び、年月だけを重ねて。

「おい？」

暫くして彼が不可思議そうに声を出した。

「気持ち良いけどさ、俺は逆が良い」

「ええ」

身を一度起す私を見上げて、彼は心配そうな顔をした。

「泣いてたのか？」

「悲しくてじゃないから」

「そうか。なら、おいで」

両手が差し伸ばされて、私の身体をその厚い胸に抱え直す。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

大きな手が生乾きの癖のある髪をかき回した。あの仕種で……。

私は目を閉じ、彼に聞こえぬように、小さく、微かに囁いた。

「お帰りなさい、父さん……」

人間同士ならば禁忌という枷に縛られて側に居るのさえ辛いだろう。今は自分が人でない事が嬉しかった。

育った私は、「ドール」の本当の役目を今に至り果たす事になった。

似た歳になった父のクローンと。

戻って来た、彼と。